交流を通して、友好の輪を広げる

～姉妹クラブ韓国・麻浦ＲＣ親善訪問の報告～

奈良西ロータリークラブでは、５月３日から５日まで、姉妹クラブの韓国・麻浦ロータリークラブを親善訪問した。奈良西ＲＣから林秀彦会長はじめ 23 人が参加し、麻浦ＲＣから徐正子会長はじめ 11 人が出席して、親睦を深めた。会議と観光を通して友好の絆を強め、和気あいあいとした雰囲気のうちに、成功裏に訪問を終えた。

ＪＡＬ機で関西空港を出発した一行は、正午前にソウル仁川空港に到着し、麻浦ＲＣのお出迎えを受けた。ソウルから南へ車で約２時間、韓国屈指の観光都市牙山市を目指した。ところが、私たちを乗せた送迎バスは、途中で大渋滞に巻き込まれて、観光を断念するハプニングに見舞われた。折悪しく韓国でも連休続きで、家族ぐるみでどっと郊外に押し掛け、車が数珠繋ぎの有様であった。やむなく会場の温陽グランドホテルに直行、定刻より遅れて、両ロータリークラブ合同例会の式典が開かれた。

奈良西の会員は、胸元にエンブレムの輝く、新調のブレザーを着用して出席。徐会長は「私たちは 1994 年に姉妹クラブになって以来親睦を深め、国際ロータリー精神の実現を図ってきました。ごゆるりとお過ごし下さい」とにこやかに歓迎の言葉を述べた。林会長は「奈良に文化を伝えた古都を案内していただくことになっており、深く感謝しています。お互いに笑顔で語り合うところに交流の意義があります」と別項のように挨拶した。

この後ケーキカットなどのセレモニーが続いた。出席者はテーブルを囲んで食事をとり、時の経つのも忘れて、交歓の輪を広げた。開催準備に努力された大辻康夫会員は、出発直前事故にあい欠席されたが、麻浦の出席者の間からお見舞いの言葉が述べられた。

翌日から観光地巡りが始まった。奈良に仏教を伝え、日本の精神文化の基礎を築いた百済王国の首都扶餘の史跡見学が、メーンである。中でも王国滅亡の悲劇を伝える落花岩の遺跡は、痛ましい限りである。敵軍に降伏することを潔しとせず、目もくらむような高い断崖から、宮廷の官女たち 3,000 人が、白馬江へ次々に投身したという。その様は花びらの散るようであり、地名の由来になっている。澄み切った川面は敗者の悲哀の幻影を浮かべて、今も悠々と流れ去っている。

扶餘国立博物館、公州国立博物館は堂々とした建築で、展示された発掘品を通して、百済栄耀の名残を知ることができた。韓国の人気ドラマのロケ地になった水原城は、李朝の偉容をとどめて、楼門や城壁の結構が絶妙である。定林寺跡、扶蘇山、皐蘭寺、武寧王陵、韓国民族村などへも足を伸ばし、楽しいプログラムを満喫した。

交通停滞のとばっちりを受けて、行程の一部がカットされ、ハードになったのは残念であった。景勝地では険しい山道も残されて歩行に苦労したが、環境保護のためにやむをえないと考えた次第である。麻浦ＲＣの一人ひとりの温かいおもてなしに、国境を超えたロータリーの友情を改めて肌身に感じた。これが、このたびの訪問を成功に導いた最大のカギであると思う。（親善訪問に参加して　椨　泰幸）